同志社 クローズ・アップ

第3回サイエンスコミュニケーター養成副専攻講演会
「サイエンスコミュニケーターに必要な能力とは
―科学をやさしく解説すればいいってもんじゃない？―」

大学生命医科学部教授　野口範子（のぐちのりこ）

２０１７年11月26日（日）同志社大学新町キャンパス尋真館にて「サイエンスコミュニケーターに必要な能力とは―科学をやさしく解説すればいいってもんじゃない？―」をテーマに生命医科学部主催の講演会を開催した。今回はファシリテーターに日本テレビアナウンサーの桝太一氏を招き、講演会を進行いただいた。最初に石浦章一生命医科学部特別客員教授と池谷裕二東京大学大学院薬学系研究科教授にご講演いただき、続いてパネリストに野口が加わり、桝アナウンサーの進行によりパネルディスカッションを行った。副題にあるとおり、科学をやさしく解説するということに加え、サイエンスコミュニケーター（以下ＳＣ）に求められる役割や意識すべきことについて、来場者も含め活発な意見交換がなされた。

この講演会の中からパネルディスカッションでのやりとりを紹介したい。

桝　科学はやさしく解説すればいいというわけではないという副題を念頭に、ＳＣの役割や常に意識すべきこととは？

池谷　熱意や好奇心を原動力として、「小さな疑問の解明」を連続させて伝えることが重要。相手にも自分の疑問として関心を寄せてもらうよう仕向ける努力も必要だ。

石浦　科学には「わからないこと」もある。ゲノムを例に取るなら、遺伝子の変異が何百万カ所あることは判明しているが、特定の変異と特定の病気との関係は現状では不明だ。解明には膨大な時間と費用がかかる。あるいは原発事故後、放射能の影響の有無について質問を受けたが、スパンが長期的すぎて答えようがなかった。そういう現状も含め、結論を伝えるのではなく良質の判断材料を社会に提供する役割が、ＳＣには求められる。

桝　放射能汚染について科学者は「可能性がないとは言えない」「直ちに影響はない」と答え、多くのマスメディアは「つまり可能性はある」という論調になった。あのような流れも、報道側に高いサイエンスリテラシーがあれば防げたのか。

池谷　科学に対して期待するものについて、おそらく我々と世間との間には差異がある。現代人には明確な答えを性急に得たがる傾向もあるが、現実はそう簡単ではない。我々はそういう点にも留意することが必要だ。

野口　まさにその差異を埋める人材を育成するのがＳＣ養成副専攻の使命だ。ＳＣは専門家からすると「何がわからないのかがわからない」という一般の疑問を汲み取った上で、わかりやすく伝える役割を担ってほしい。

桝　科学の魅力を伝える意義は？

池谷　専門的な説明を必要としない人に対してまでサイエンスコミュニケーションは本当に必要なのかという、そもそも論はあり得る。しかし科学の発展には多くの税金が使われる。科学の魅力を伝え、納税者に納得してもらう必要はあるだろう。科学に無関心なまま健康を損なう人が増えれば、社会保障費の支出も増大する。サイエンスコミュニケーションは、結果的には個人のため、社会のためになる。

野口　サイエンスリテラシーを身につけたＳＣが政治家や科学者と一般社会との間に介入することにより、国民に科学を見る力がつけば、ひいては政策も変わり得ると期待している。

学生　日本で科学やサイエンスリテラシーへの意識を高めるためにすべきことは？

石浦　科学は一見して役に立たないこともあり、多くの実験が必要だから短期間では研究成果が出ないこともある。そこを小学校から学んでほしい。長期的視野に立ち、最終的には科学は世界の何かの役に立っているという考え方を、教育によって広げていくべきだ。中国のように政界の上層部にも理系出身者が増えるといい。

野口　小学校の教師にも理科の面白さを伝える技術は必要。各校にＳＣを一人ずつ配置するなどの方法も考えられる。

池谷　私の出演した特別番組では、博士号を持つ専門家が現場に入り、番組の質を担保している。まさにＳＣだ。

桝　教育やメディアの現場から変えていけば、理科や科学への一般的な価値観が変わる可能性がある。文科省や、マスメディアの一員であるテレビ局にも、もっと理系出身者が必要だ。一方で文系出身者だからこそ作れる科学記事もある。文系出身者が理系への理解力を持つことが最善の形。それが仲介役であるＳＣだ。

野口　改めて、発信元である科学者側が注意すべきことは？

池谷　近年、過度にアピール上手な科学者が増えてきた。論文だけでなくマスメディアへの登場頻度も業績の評価対象になっていることが原因だ。

石浦　キャッチーなコピーをつければ目立ち、研究費がつく。いわば経済原理が研究・教育に働いている点が問題だ。本来の、自由度の高い研究の楽しさを世間に理解してもらう工夫も我々に必要であろう。

同志社
クローズ・
アップ

女子大学今出川校地のラーニング・コモンズが目指すもの

女子大学教育開発支援センター長　大西秀之（おおにしひでゆき）

ラーニング・コモンズとは

2017年9月女子大学今出川校地の楽真館のリニューアルに伴い、待望のラーニング・コモンズが開設されました。ラーニング・コモンズは、まだ一般には聞きなれない用語ではないかと思われます。ラーニング・コモンズとは、一言で表現するならば「学生が集い自由に学習する場」といえる空間・施設です。

なぜラーニング・コモンズが必要なのか

こう説明すると、「なんだ立派な自習室ができたのか」と思われるかもしれません。またその理解は、必ずしも間違いではありません。ただ近年、日本を含む世界中の数多くの大学で、相当な費用を投じてキャンパス内でも利便性の高い場所にラーニング・コモンズが建設されています。このような話をしますと、「学生の自習室に多額の費用を使うとは無駄ではないか」、あるいは「昔と違い学生の課外時間にも至れり尽くせりのサービスが必要な時代になったのか」、といった批判や感慨を抱かれる方も中にはおられるかもしれません。

しかし、ラーニング・コモンズの建設は、「知識の伝達」から「知識の創出・自主学習」へと、大学を含めた教育のあり方が大きく転換していることが背景にあります。知識の数をできるだけ増やし、決められた質問に対し解答することが良しとされていた時代は、「知識の伝達」こそが教育現場の果たすべき役割でした。

これに対し、情報化社会を迎えた現在、スマートフォンなどの情報端末をちょっと操作すれば、どんな情報でも簡単に知ることができる世界となりました。この結果、知識を記憶しその量を誇ることの価値が、極めて低下したことは否めません。また実際、現在の学生たちは、知識の内容そのものよりも、その知識を知ることにはどのような意義があるのか、という方向に興味関心が確実に移ってきています。

こうした状況を前にした時、知識をただ教授し覚えさせる教育から、知識の自主的な活用を促す教育への転換は、必然かつ必要不可欠なこととご理解いただけるのではないでしょうか。そういった意味で、ラーニング・コモンズの建設は、単なる学生サービスとして自習施設を提供しているのではなく、教育の大転換に対する適応にほかならないのです。

ラーニングコモンズオープンウィーク（同志社女子大学楽真館ラーニング・コモンズ公式Twitterより転載）

知識を創造する共有空間

情報化社会の到来は、誰でも何時でも情報が入手できるからこそ、それをどれほど有効に活用できるか否かによって成果に大きな違いが生じるため、むしろインテリジェンスの格差は拡大して行くとの指摘がなされています。脱・知識偏重を目指した入試改革や、学生自らが考え能動的に学びを深めるアクティブ・ラーニングの導入など、昨今の教育現場で推進されている種々の取り組みは、そうした社会状況に応えるためのものにほかなりません。

このような教育環境の変化を考慮に入れ、本学のラーニング・コモンズもまた、知識を創造する場としての役割を果たすことを目指しています。そのため、同施設ではＩＴ機器の利用をはじめとする、ハードやシステムの面で相当な設備や施設を備えています。こうした設備や施設を活かし学生の自主学習を促すため、本学のラーニング・コモンズでは、様々なコンセプトを設けています。そのなかで、ここでは学びの「集約化」と「可視化」を提示したいと思います。

現在6学部11学科を抱える本学では、学生による多種多様な学習活動が課外でも積極的に行われています。しかし残念ながら、従来そうした活動の多くは、当該学生以外には見えない所で行われていました。この状況に対し、ラーニング・コモンズに様々な学習活動を集約しそれらを可視化すれば、当事者以外の学生たちにも大きな刺激となり、更にはその活動に加わる切っ掛けになるのでは、それがこの二つのコンセプトに込めた想いです。たとえば、留学の説明会や報告会、上級学年で取り組む課題、卒業研究の制作などなど、ラーニング・コモンズという共有空間で行われることによって、直接関与していない学生がそれらを目にし、そこから次の当事者となって同施設を使い自らの学びを深める側になる、そんなことを期待しています。

大学を更なる学びの場に

とはいえ、本学のラーニング・コモンズをご覧になられた方は、まるで大学にカフェやファミレスのような場ができたと思われるかもしれません。あえて誤解を恐れずにいうならば、ラーニング・コモンズは、学生たちがカフェやファミレスで行っている自主学習を大学に取り返すことも目的としています。そういった意味でも、ラーニング・コモンズは、大学が現在の社会状況に対応するために開設した、今後最重要となる学習施設であると考えています。

Ｉ階ラウンジ（同志社女子大学楽真館ラーニング・コモンズ公式Twitterより転載）

２階スタディールーム（同志社女子大学楽真館ラーニング・コモンズ公式Twitterより転載）

特別支援教育10年の歩み

中学校・高等学校特別支援教育指導員
岩本脩平（いわもとしゅうへい）
中井裕子（なかいゆうこ）

1. 10歳を迎えた特別支援教育

特別支援教育は、２００７年4月の学校教育法一部改正によって正式に始まりました。全体指導から「外れる」ことを「問題」と捉えるのではなく、指導から「外れる」生徒は「困り」を表現している生徒だと再定義し、学習や生活のうえで生徒自身が困らないようにする工夫が求められるようになったのです。集団では対応が難しい生徒に対しても、そのユニークな個性を理解し、個に応じた支援を積み重ねていき、生徒自身の能力を高めていくことが求められています。特別支援教育が始まってからの10年の間に、発達障害の診断基準が見直され、法的な観点からも支援の必要性が強調されるようになりました。

2. 合理的配慮をめぐって

障害者の権利条約を２００６年に採択したことで、「合理的配慮」が求められるようになりました。障害者権利条約の定義する合理的配慮とは、「障害者一人ひとりの必要を考えて、その状況に応じた変更や、調整などを、お金や努力などの負担がかかりすぎない範囲で行うこと」とされています。２０１６年に障害者差別解消法が施行されたことも考慮すると、「一人だけ特別扱いはできない」と、合理的配慮を否定することは、障害を理由とする差別に該当する可能性があります。

発達障害者支援法も２０１６年に改正されました。最も大きな変更点は「発達障害者への支援は『社会的障壁』を除去するために行う」という基本理念が追加された点ではないかと思います。このことについて、上西・三谷（２０１６）は、『発達障害＝発達特性×デザインバリア』という公式を提示しています。発達特性など、「発達の偏り」を定数aとし、発達特性ゆえにデザインレベルのバリア（障壁）によって社会への参加が妨げられている状態を変数xとした場合、これらの交互作用を「発達障害」と見なします。特性が弱ければ、「デザインバリア」が同等であっても発達障害の程度は小さくなり、逆に同じ特性を持っていたとしても「デザインバリア」が小さくなれば発達障害の程度は小さくなることを公式は示しています（図1）。

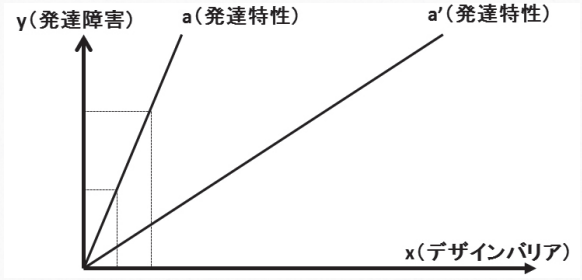

図１：発達特性とデザインバリアの関連（三谷，2016より引用）

２０１３年に改訂されたアメリカ精神医学会による診断マニュアルＤＳＭ－５において、自閉症スペクトラム症の診断基準に「その症状は、社会的、職業的、または他の重要な領域における現在の機能に臨床的に意味のある障害を引き起こしている」という文言が加えられているように、特性が「問題」になるかどうかは社会的文脈に依存しています。つまり、何らかの発達特性を持っていたとしても、周囲のサポートや配慮によって障害される部分が少なくなり、他の生徒たちと同じように物事を達成できるのであれば、そこには発達障害としての姿は立ち現れなくなっていきます。社会的な場面において「問題（障害）」が構成されていくのであれば、その「問題（障害）」を生じさせないように無理のない範囲でユニバーサルデザインに修正していくことが、これからの特別支援教育には求められているといえます。

3. そして次の10年へ

生徒が置かれた環境デザインに対して、何がバリアとなっているのかを見立て、可能な範囲で必要な足がかりをつけてあげることが合理的配慮です。そうした配慮のうえで、生徒には「どういう時に失敗しやすくて、どういう時はうまくやれるのか」という自分自身の特性理解と、「困ったときにどうするか」という調整力を身につけられるようにサポートしていくことで、その後の適応・自立を促していけるのではないかと思います。

合理的配慮は全てオーダーメイドです。参考として国立特別支援教育研究所では、『インクルーシブ教育システム構築支援データベース』と称して、合理的配慮の事例を紹介しています。また、図2は『平成27年度文部科学省発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業』において、上西・三谷・岩本・三谷（２０１６）が作成したQ&A方式の冊子です。発達障害や合理的配慮、小中連携等、基礎的な概念をまとめたものであり、ホームページからダウンロードすることができます。次の10年の特別支援教育を構築していく資料となれば幸いです。

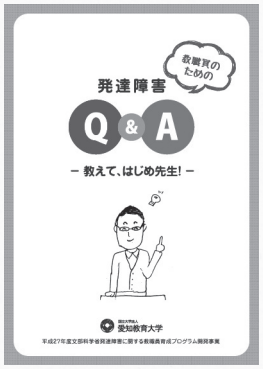

図２：教職員のための発達障害Q&A―教えて、はじめ先生！―

〈参考文献〉
上西創・三谷聖也（２０１６）第四章「ライフデザインと合理的配慮」布柴靖枝（監修）『発達障害のライフデザイン支援』平成27年度文部科学省発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業 p49-66.
上西創・三谷聖也・岩本脩平・三谷理絵（２０１６）教職員のための発達障害Q＆A ―教えて、はじめ先生！― 平成27年度文部科学省発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業

同志社香里高等学校軽音楽部の活動報告
―「軽音部」から「軽音楽部」へ―

香里中学校・高等学校教諭　髙瀬恭三（たかせきょうぞう）

同志社香里高等学校軽音楽部について

本校軽音楽部は高校のみのクラブで、部員は各学年約二〇名、三学年では六〇名を超えることもある。本校で一、二位の部員数を誇っている。二か月に一回のペースで定期演奏会や部内発表会を行い、また春休みと夏休みには長野県の北志賀高原で五泊程度の合宿を行っている。他校との交流も盛んで、大阪府下の高校はもとより関西地区や関東・中部地方の高校とも合同ライブを開催している。

険しい道のり

生徒の要望で二〇〇一年に創部した本校軽音楽部。しかし、周囲から「まともな部活動」として認められるまでの道のりは険しかった。入部してくる部員のほとんどが成績下位者。加えて、中学時代に部活動の経験がなかったり、経験があってもすぐに辞めてしまったりと、挨拶ができないのは普通、練習を時間通りに始められないどころか、そもそも練習に来ていないのが当たり前という状態であった。

また、クラブに対する教職員のイメージも芳しいものではなかった。エレキギターやドラムの音に対する抵抗感、軽音楽に対するダークなイメージ、そして加入している生徒の成績・生活態度の悪さがマイナスの相乗効果を生み出し、周囲の目は非常に厳しいものであった。

軽音楽の甲子園を目指したい

本クラブの転機は、一人の部員の要望からだった。

「本気で音楽をやりたい。運動部と同じように大会を目指して、みんなで青春を謳歌したい。」

熱い思いに心を揺り動かされたのは、顧問だけではなかった。一人また一人と、真剣に部活動と向き合う部員が現れた。その輪は年々広がりを見せ、徐々に統率のとれた部活動へと変化を遂げた。そして軽音楽部の予選会でも実績を残せるようになり、関西ではその名を知られるようなクラブへと成長した。その「階段」を、関西の軽音楽部の世界では非常に有名な大会“We are Sneaker Ages”の成績で示したい。

第三二回大会　予選会	第四位
第三三回大会　グランプリ大会（決勝大会）	第十一位
第三四回大会　グランプリ大会（決勝大会）	
準グランプリ大会（決勝大会）	
第三五回大会　グランプリ大会（決勝大会）	
準グランプリ校賞（準優勝に相当）	

軽音楽部の大会は、五、六年ぐらい前はせいぜい各都道府県レベルでのコンテストやフェスティバルが行われる程度であったが、今では関西地方、関東地方といった地域レベル、さらには全国大会もいくつか行われるようになった。また、全国高等学校文化連盟という高校の文化部を統括する組織に軽音楽部門が新たに加わったことで、昨年の十一月に行われた近畿高等学校総合文化祭（第三七回大会）において、初めて軽音楽部門の大会が開催された。本校も予選会で好成績を収め、この記念すべき大会に駒を進めることができた。

かつては多くの高校で部員が好き勝手にバンド活動を行っていた軽音楽の分野にも、野球部でいう「甲子園」のような存在が生み出された。そして、本校も生徒やバンドの個性を見極めながら様々な大会に参加し、運動部や吹奏楽部と同じように、自分たちのパフォーマンスに一喜一憂しながら青春を謳歌している。

「軽音部」から「軽音楽部」へ

本校は先述のとおり、関西の高校軽音楽の世界ではその名を知られるようになった。しかし、その評判にふさわしい部員ばかりというわけではない。軽音楽の一般的なイメージ通り、軽い気持ちで入部してくる生徒も少なからずいる。本クラブの正式名称が「軽音楽部」ということを知らずに、「軽音部」に入りたいと言いながら入部届を出してくることもよく見られる光景である。

私は本校の部員が自分のクラブの名称を公の場できちんと言えることを非常に大切にしている。自分が思っている以上にその世界で注目されていること、その注目に見合うような人間に成長してほしいこと、軽音楽の一般的なイメージによって過小評価されることなく自分が進んでいる道に誇りを持ってほしいこと。そのような思いを説明して接しているうちに、公の場で自分のクラブ名を「軽音部」と名乗る部員はいなくなっていく。

かつて「軽音部」だったクラブは、確実に「軽音楽部」へと成長を遂げている。まだまだ発展途上のクラブであるが、いつかはその名を全国に轟かせたいと思っている。その日がくるまで、部員とともに切磋琢磨の日々を続けていくつもりである。

同志社 クローズ・アップ

動物園実習

女子中学校・高等学校教諭　北村貴文（きたむらたかふみ）

1. はじめに

本校のコースには、大学での学びを視野にいれ、高大接続の取り組みや多彩な実習など、受験勉強に終始しないリベラル・アーツコース（LA）と、早い段階から将来を見据え、英数理系科目を重点的に学ぶワイルド・ローヴァーコース（WR）の2つがあります。WR生の中には、将来、医・歯・薬学部への進学を目指している生徒が多く在籍しています。

WRでは、長期休暇中に特別講習があり、春期講習の中で、中学第一学年のWR生は、京都市動物園の協力の下、動物園実習を行っています。この動物園実習では、さまざまな動物について詳しく学習することはもちろんですが、獣医や動物に関わる仕事について、実際の現場で働く方々を間近で見ることができ、そして、それにまつわる貴重なお話を聴くことができる、普段の学習では得ることのできない機会となります。この実習を踏まえて、生徒たちが、将来の職業について、より具体的に考えるきっかけにしてほしいと願いWRコース設立当時より続けている実習です。

2. 実習内容

多くの生徒は、これまで「レクリエーション」として動物園を利用しています。しかしながら、生徒は本実習を通して、「種の保存」、「教育・環境教育」、「調査・研究」といった、これまでに利用してきた動物園の役割とは異なる部分について考えることになります。そのため、「レクリエーションとは異なる動物園を学ぶ」という目的意識を強く持ってもらうために、生徒には事前学習の機会を設けています。事前学習の内容は主に調べ学習です。具体的には、獣医の仕事、動物園の役割、動物の行動など、実際に講演・案内していただく内容に深く関連した事項について、生徒は本やインターネットなど、さまざまな文献から調べてきます。実習中には、生徒は調べ学習の中で興味を持ったことや、疑問に思ったことなどを、職員の方々に積極的に質問しており、事前学習によってより良い動物園実習になっています。

動物園実習当日のプログラムは、主に「動物園職員の方による講演」、「各動物舎の見学」、「バックヤード見学」、「霊長類の観察」です。講演では、動物園の意義や動物園の取り組みといった、動物園全般の内容についての講演をしてもらいます。各動物舎の見学では、動物園職員の方に帯同していただきながら、それぞれの動物の特徴の解説、また、各動物舎の特徴や取り組みについても説明してもらいます。動物園職員の方は普段動物を見るときとは異なる視点を与えてくれるため、生徒は興味をもって隅々まで観察しています。バックヤード見学では、生徒は動物の治療室やエサの調理場などを見学し、そこで働く獣医師や飼育員の方々から仕事内容や、各動物での違いなど、さまざまなお話をしてもらいます。このバックヤード見学は、普段見ることのない動物園の裏の様子や、そこで働く方々の実際の姿を見ることができるため、生徒にとって特別な経験となっています。霊長類の観察では、チンパンジーやマンドリルについて、それぞれの個体の普段の様子や特徴などを動物行動学の先生に説明して頂きながら、タッチモニターを使った数字の系列を学習する様子を観察します。系統的に研究することの意義や方法についても学びます。

いずれの場面でも、生徒は動物の行動には注視し、動物園職員の方の言葉には耳を傾け、常にノートを片手にメモしています。そのメモの内容、また、実習後の振り返りの記述内容を見ると、事前学習から動物園実習までのすべての過程が、生徒にとって普段意識しない動物園の姿を考え、さらに、将来の職業について考える良い機会になっていることがうかがえます。

霊長類の観察の様子

3. おわりに

動物園実習は生徒が意欲的に参加し、実習に対して、一人ひとりがそれぞれの意義を感じていると思います。また、この実習が行われるようになってから毎年のように獣医学部へ進学するようになりました。このような点でも、中学1年生の段階で、この経験をする意味は非常に大きなものであると考えています。

京都市動物園のご協力に深く感謝し、動物園実習をより良いものにしていくとともに、今後も生徒が意欲的に取り組める有意義な実習を模索していきたいと思います。

治療室の見学の様子

エサの調理場の見学の様子

「道草教育」授業づくり研究会を終えて

小学校教諭　海士部真吾（あまべしんご）

「道草教育」という考え

「道草教育」、この言葉に、同志社小学校が目指す、子どもたちを中心とした授業づくりの考えが込められています。教師ですから、子どもたちの前に立ち、道を示して先導する者であることは必要です。ですが、そうであることは自覚しながらも、同志社小学校では、子どもたちの傍らに寄り添って、子どもとともに歩みを進めることを大切にしています。子どもたちが迷い立ち止まったときは、例えその先が見えていたとしても一緒に立ち止まって考えます。そして、その時の子どもたちの様子をしっかりと見取ります。子どもたちは、そこでどんな行動を起こし、どう考え、どんな判断をしようとしているのか…。すると、必ず見えてきます。「今、この子たちにとって大切な見方、考え方、力、技、関わり…。」といったことが。子どもたちの傍らに寄り添い、ともに歩むことで見出しうる、そうしたものの一つ一つは、きっと今そこにいる子どもたちが切実に求める大切な何かであるはずです。その何かを「あー、これっていいな。素敵だな。楽しいな。」といった実感を伴う経験にして子どもたちと共有していく。すると、きっとまた、子どもたちは自ら力強く歩みを進めることになるのではないでしょうか。

ですから、同志社小学校では、「道草教育」という子どもたちへの関わりを通して、「子どもたちが自ら学習に向かう姿や構えを育てること」を大切にしています。自ら歩みを進める中にこそ、真の迷いや悩み、また、その先に光明を見出す真の喜びがあると考えるからです。そして、「人が生きる上での土台となる『根っこの教育』」を大切にしています。「根っこの教育」、それは、子どもたちが「なるほど、こうするといいなあ。」「これって、おもしろいなあ。」「これって素敵だなあ。」といった実感を伴う経験です。そうした経験は、必ずまたいつか、何かを考え、判断し、行動する際の土台となり、子どもたち一人一人の自立を支援することでしょう。授業は、そうした経験を子どもたちと歩みをともにしながら共有し、積み上げていく営みであると考えています。

「道草教育」授業づくり研究会

二〇一八年二月三日（土）、この「道草教育」の考えに基づく〝授業づくり研究会〟を本校で開催しました。開校から十二年、「道草教育」として積み上げてきた本校の授業を公開し、広く先生方からご意見を頂戴しようということから、研究会を開催する運びとなりました。本校主催による研究会の開催は初の試みでもありました。二コマの公開授業を設定し、一コマ目は、全ての学級が授業を公開しました。二コマ目は、国語、社会、算数、理科の各教科と、宗教の授業をそれぞれ一学級、研究授業として公開し、分科会をもちました。研究協議の適正規模を考え、参加対象を、法人内学校、及び私立小学校連合会加盟校に限定させていただきましたが、百八名もの参加を得ることができ、非常に有意義な研究会となりました。

研究会のテーマには、「積み上げた『価値』を子どもたち自身が学びに持ち込み、心地良い学びの〝空気感〟を生み出す授業づくり」を掲げ、各教科部での取り組みが始まりました。『価値』とは、いわゆる「道草教育」における『根っこの教育』のこと。その『価値』を、各教科の特性や単元に照らして吟味し、その『価値』を子どもたちが実感として共有することのできる授業づくりに努めてきました。互いに授業を見合い、検討するとともに、外部より講師の先生方（椙田萬理子先生〈元奈良女子大学附属小学校副校長〉・由井薗健先生〈筑波大学附属小学校教諭〉・和田秀夫先生〈愛知学泉大学准教授〉・藤井透先生〈同志社大学理工学部教授〉・山崎敏昭先生〈同志社高等学校教頭〉・和田一陽先生〈同志社中学校理科主任〉・共同研究者として吉岡寛和先生〈光華小学校〉）をお招きし、教科ごとに貴重なご示唆をいただきながら研鑽を積むことができました。

そして迎えた研究会当日。授業を参観された先生方からは、「子どもたち一人一人を大切にし、寄り添っておられる様子がよくわかり、うれしく思いました。」「子どもたちが集中して学習に取り組み、考えを伝え合っているなと思いました。」「単元の中で、本時がどのような役割を果たすのかが明確なので、授業のねらいがぶれないと感じました。また、子どもたちがとっても自然で心地良かったです。」…といった感想を多くいただくことができました。「道草教育」という考えを授業としてどう具現化していくか。その模索と練り合いを通して熟成してきた授業は、十二年という年月を経ながら、間違いなく子どもたちとともに形作られてきていると実感することのできる機会となりました。

これから

本校主催の研究会としては初の試みとなった〝「道草教育」授業づくり研究会〟。子どもたちの学びの姿に、大変高評価をいただいたことは、何よりも有り難く、また、誇りに感じることです。毎年度、校内において、真摯に授業に向き合い、様々な形で授業研究に取り組んできた一つの成果として受け止めることもできるでしょう。他校の先生方の、「道草教育」に対する認知も深まったに違いありません。ですが、これをもって「道草教育」が確固たるものとして構築されたわけではありません。「道草教育」は、常に子どもたちと歩みをともにし、子どもたち一人一人をしっかり見つめる眼差しをもって授業を構想する過程で生み出されるものです。研究会は、こうした授業づくりに向ける教師の姿勢を一層強固にする取り組みともなりました。「道草教育」は、こうした教師の姿勢が生み出す灯火であり、これからもこの灯火がますます意気盛んに燃え続けるよう、授業研究に取り組んでいきたいと考えています。